

# 青丘文庫研究会 月報 No.226

2008年9月1日

青丘文庫研究会 〒657-0064 神戸市灘区山田町3-1-1 (財)神戸学生青年センター内  
 TEL 078-851-2760 FAX 078-821-5878 <http://ksyc.jp/sb/> e-mail [hida@ksyc.jp](mailto:hida@ksyc.jp)  
 在日朝鮮人運動史研究会関西西部会(代表・飛田雄一)  
 朝鮮近現代史研究会(代表・水野直樹)  
 郵便振替 <00970-0-68837 青丘文庫月報>年間購読料3000円  
 他に、青丘文庫に寄付する図書を購入費として2000円/年をお願いします。

## < 巻頭エッセー >

### 義和君と祇園祭

金慶海

義和君(名は李<sup>イ</sup>。義親王 1877年-1955年 第26代国王・高宗と張尚宮との間の子)一行が、1896年7月、京都の祇園祭を見るようにと勧められたので見に行った。山鉦を見た義和君は、「…頗る不<sup>おきと</sup>興<sup>おもひ</sup>の色<sup>いろ</sup>にて怒<sup>おこ</sup>々<sup>おこ</sup>須<sup>す</sup>磨<sup>ま</sup>の方に帰った…」と報じられている(「大阪朝日新聞」1896年7月26日)。

その理由がわからないので記者が聞くと、山鉦の中には神功皇后の“三韓征伐”や加藤清正に関するものが多かったからだ、とわかる。それで、神功皇后の“三韓征伐”と加藤清正について。

まずは、“神功皇后の三韓征伐”伝説について。

神功皇后がいたとされる3-4世紀、朝鮮半島には三韓(馬韓、弁韓、辰韓)はなくなり「三国時代」だった(高句麗、百濟、新羅を指す)。まずは、この呼び方が間違いだ。次に、神功皇后のも勿論、日本のどの古い歴史書を見ても、高句麗まで攻めたなんぞは、ない。即ち、ソウル以北の地名もない。せいぜい南部朝鮮の地名が書かれている程度。朝鮮の有名な歴史書でこの三か国のことを記述している「三国史記」(1145年編纂)などでは、地方の仔細な農民蜂起までが記されているが、日本が攻めてきたはもちろん、神功皇后が“征伐”に来たなんぞは、一行もない。

彼女に関する物が、兵庫県内に数え切れないほどある。それらの詳しいことについては、「兵庫のなかの朝鮮」(明石書店 2001年5月発行)で反論しているのでご参考に。

驚いたこと。「九州のなかの朝鮮」(やはり明石書店 2002年5月出版)が出版されたが、ここでも彼女のことが書かれている。写真入りで各地にある彼女と関連した“遺跡”が紹介され丁寧にも解説付き。その読み方によれば、そこらを根城に朝鮮を“征伐”しに行ったようにも受け取れる書き方。

神功皇后のことや彼女の“三韓征伐”を、伝説として書くならばそれで良しだが、実際にあった歴史的事実であるかのように記述することは、歴史が好きな人として、史実をきっちりと見る歴史家としては、いただけない。伝説はどこまでも伝説であり、即、史実とはいかない。

次に、加藤清正について。

1999年の夏、九州で強制連行についてのシンポジウムがあったが、その席で熊本大学のある教授が、この加藤清正が、熊本地方を開拓し日本の三大名城の一つである熊本城を築城したように、大きな業績を残した、と高らかに報告した。だがしかし、それを行うための膨大な資金はどう調達したのか、については述べなかった。それは、加藤清正が朝鮮の東北部に攻め入り、当地の豊

富な砂金を略奪して得たのが、その開拓や築城の資金源になったのだった。朝鮮侵略で、どれだけの物資を略奪しそれに反抗する人々を殺し焼き払ったのか、については、その教授はふれず。

私が小学校か中学校に通っていた時、こんなことを教わった。「야야 울지 말아 왜놈이 온다」(「これ 泣きなさんな ウエノムが来るよ」)

泣きじゃくってやまない幼い子どもを、一言でそれを止める言葉としてこのような言葉を使った、と先生は話していた。即ち、幼い子どもまでもが日本の侵略者たちをどれだけ恐れ忌み嫌っていたか、の典型的なはなしだと思う。あれから、すでに400年以上も過ぎてのいま現在、私が教わったことばだということが大切なことだと思う。日本軍が中国などアジア諸国に侵略した時、「三光作戦」という蛮行を行ったことで世界が指弾したが、その元祖はどうにもこの加藤清正にあったようだ。

朝鮮人は、以上のような事柄を忘れてはいない。忘れようにも歴史的事実なので、拭ったり消し去ったりして忘れることができるものでもない。だが、これからの両国の友好と親善のためならば、過去の不幸な出来事を許す勇氣は持っている。問題は、加害者側の日本の真摯な謝罪だ。

1996年7月、用事があって京都にいった。ついでに勿論、初めて山鉾を見て回った。まだまだ、案の定、船鉾(下京区新町)と占出山(中京区錦小路通室町)の二つに、神功皇后の“三韓征伐”や加藤清正の文字があった。

いま現在のこと。同じ「朝日新聞」に、「山鉾行事『祇園祭の柱に』 京都 無形文化遺産を歓迎」の見出しで、山鉾について報道(2008年7月31日)。確かに、京都の山鉾は立派ですばらしい。山鉾を無形文化遺産にすることは大賛成だ。でも、条件がある。それは、神功皇后や“三韓征伐”、加藤清正の文言を除くか、それが出来ないならばこれらの山鉾は除外することだ。京都人の良識ある方々は、110年ほど前のことからでも教訓を汲み取ってほしい。山鉾が立派だということにかこつけて、そのことを隠れミノにし、侵略思想を鼓舞するような裏行為に加担してはならない、と思うが。

## 第260回朝鮮近現代史研究会(2008年5月11日)

### 植民地朝鮮における中国人労働者(その6)

#### - 1934年の中国人労働者入国制限問題 - 堀内 稔

植民地下朝鮮に働き場を求め、多くの中国人労働者が流入してきたことは、これまでの報告(「赴戦江水電工事と中国人労働者」、「新聞社説に見る中国人労働者問題」、「中国人労働者と労働争議」、「鉱山と中国人労働者」、「石工などの技術系労働と中国人」)で見えてきたとおりである。こうした中国人労働者に対する一般的世論は、朝鮮人の労働を奪い労働市場を混乱させるというもので、決して好意的ではなかった。

しかし、その一方で安価な労働力を求める使用者側の意向があり、こうした意向を配慮しつつ朝鮮総督府は、中国人労働者流入による朝鮮人労働者への影響(特に失業問題)から彼らの居住、就業条件などにつき制限を加えるなどの方策を採ったが、その入国については制限しなかった。そこには、満州への大量の朝鮮人移民問題に対する中国への配慮があったものと思われる。

ところが、1934年になって突然入国制限が実施された。入国制限の方法としては「従来有名無実の外国人入国取締令を強化」し、「所持金一人あたり100円を持っていなければ入国を許可しない」というもので、とりわけ所持金一人あたり100円は出稼ぎ労働者にすればとんでもない大金で、実質的に中国人労働者の入国を拒否するものであった。

当然、こうした入国制限に対する朝鮮における中国人社会の反発は大きく、1934年9月に

はソウルで大々的な抗議行動が行われた。

この入国制限直後には仁川に上陸した中国人労働者の数は、「その数は平常時に比べて10分の1に過ぎなかった」とか、「従来の18分の1にあたる56人に過ぎない」などと新聞報道されているとおり激減した。しかし、この入国制限政策がどこまで厳密に実行されたのかは疑問が残る。なぜなら、その後の在朝鮮中国人の数を見る限り、この制限政策は厳密に行われたとは言い難いからである。

朝鮮総督府『統計年報』による在朝鮮中国人の数をみると、1933年41,266人、1934年49,334人、1935年57,639人、1936年63,981人と推移し、1937年日中戦争の勃発によって4万人代に落ちるが、その後は再び増加傾向をたどっている。要するに、この数字からは先の入国制限による影響を読み取ることはできないのである。

なぜこの時期に中国人の入国制限が実施されたのか。しかも、実施直後を除きほとんど成果をあげることなく終わったのか。残念ながら発表の時点では、これらの疑問に答えうる資料を見つけることはできなかった。

1934年4月内務省を中心に拓務省、文部省、朝鮮総督府などで在日朝鮮人の失業問題、その他社会問題に対する調査研究を基礎として対策が立てられ、同年10月に「朝鮮人移住対策の件」として内閣決定される。その内容は、朝鮮内において朝鮮人を安住せしむる措置、朝鮮人を満州および北鮮に移住せしむる措置、朝鮮人の内地渡航のいっそうの減少、内地における朝鮮人の融和 - というものであった。先の朝鮮における中国人入国制限が、こうした在日朝鮮人の対策と関連しているのかどうか。今後の課題としたい。

#### 第304回在日朝鮮人運動史研究会関西支部会(2008年6月8日)

### 「在日朝鮮人社会主義運動関連機関紙に関する簡単な資料紹介」 小野容照

去る6月8日の第304回在日朝鮮人運動史研究会関西支部会では、「在日本朝鮮人社会主義勢力の形成に関する若干の考察 『大衆時報』臨時号の資料紹介を兼ねて」という題目で、新発見の『大衆時報』臨時号を手がかりに、1920年代はじめの日本における朝鮮人社会主義勢力の形成に関する報告を行った。これに関しては、今年10月発行の『在日朝鮮人史研究』38号に掲載予定の拙稿「金若水の渡日と『大衆時報』創刊 日本における朝鮮人社会主義勢力の形成に関する一考察」を参照していただくこととし、月報では在日朝鮮人社会主義運動に関する資料(朴慶植氏の資料集に収録されていないもの)を簡単に紹介することとしたい。

まず、日本における朝鮮人の初期社会主義運動を分析する際、最も重要な資料が『大衆時報』である。これは、黒濤会の機関紙『黒濤』に先駆けて発行された雑誌である。今まで、1922年6月発行の『大衆時報』第4号しか現存しないものと思われてきたが(大原社会問題研究所で閲覧可能)、実は1921年5月1日発行の創刊号の代わりに発行された臨時号(1921.5.25)も残っている。これは、韓国の円光大学校に所蔵されており、円光大学校の名誉教授で民俗学者の朴順浩氏が発見したものである。臨時号は、紙幅が全50頁を越えており、内容も豊富で、当時の朝鮮人社会主義者の思想的傾向を分析する際、とても重要な資料である。一方、翌年に発行された第4号は金若水の影響が顕著に現れた雑誌となっている。1922年に朝鮮では「金允植社会葬」を契機として、上海派高麗共産党国内支部と、その他の共産主義グループ間で対立が起きるのだが、社会葬に対する、日本で活動していた社会主義者の見解を知り得る資料として、第4号は特に韓国で注目されてきた。

在日朝鮮人社会主義運動の資料としては、北星会の機関紙『斥候隊』(1923年創刊)や一月会の機関紙『思想運動』(1925年創刊)が有名であるが、1924年に創刊された『解放運動』という雑誌も、創刊号が残っている(大原社会問題研究所で閲覧可能)。北星会は、日本と朝鮮に活動拠点を持っており、金若水ら主力は朝鮮で活動していたのだが、朝鮮で活動していた北星会系の社会主義者が発行した機関紙が『解放運動』であった(ただし、発行は日本)。官憲資料によれば、『解放運動』はすぐに廃刊になったようである。また、私自身は内容を確認出来てはいないのだが、北星会結成の中心人物の一人、卞熙瑢が1922年に創刊した『前進』という社会問題研究雑誌も、第4号が韓国に残っている。

社会主義運動に関する資料とは少し趣が異なるが、李達(李東宰)が1919年に創刊した『新朝鮮』も注目すべき資料である(創刊号が学習院大学東洋文化研究所に所蔵されている。水野直樹氏のご教示による)。これは日本語で書かれており、日本人に朝鮮の状況を伝える目的で発行された雑誌である。原敬のインタビューらしきものも掲載されているが、その信憑性は怪しい。この資料は、何よりも日本社会主義同盟の機関誌『社会主義』に寄贈図書として紹介されたことが重要である。堺利彦をはじめとする日本人社会主義者の朝鮮や、植民地認識を分析する上で有益な手がかりとなるだろう

以上のように、官憲側資料や広告、新聞記事などから、その存在のみが指摘されてきた資料も、断片的ではあるが実物を確認することが出来るようになってきている。これらの資料を活用することにより、官憲側資料や、主に韓国の研究で積極的に活用されている、朝鮮人社会主義者がコミンテルンに送った報告文書などの内容の信憑性をより精密に検討することが可能となる。今後も、新資料の発掘に努めるとともに、朝鮮社会主義運動研究に邁進していきたい。

### 青丘文庫研究会のご案内

第306回在日朝鮮人運動史研究会関西部会

9月14日(日)午後3時~5時

「戦前・戦時下の石川県の在日朝鮮人

- 人口・土工・融和団体・朝鮮飴売り -」 砂上 昌一

第261回朝鮮近現代史研究会

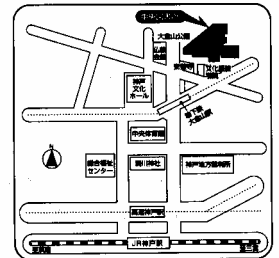
9月14日(日)午後1時~3時

占領期在日コリアン・華僑系新聞の政治論説(1948-50)

『国際新聞』『新世界新聞』を中心に

梶居佳広

会場 神戸市立中央図書館内 青丘文庫 TEL 078-371-3351



### 【今後の研究会の予定】

10月12日(日) 在日(未定) 近現代史(黒河星子)。研究会は基本的に毎月第2日曜日午後1~5時に開きます。報告希望者は、飛田または水野までご連絡ください。

### 【月報の巻頭エッセーの予定】

10月号以降は、斉藤正樹、坂本悠一、高野昭雄、塚崎昌之、土井浩嗣、中川健一、玄善允、松田利彦、三宅美千子、吉川絢子、李景珉。よろしくお願ひします。締め切りは前月の10日です。

### 【編集後記】

・ 神戸はきょうの朝、ひどい雷でした。みなさんの所ではいかがでしたでしょうか。「地震・雷・火事・おやじ」やはり、怖いのはこの順でしょうか？ 飛田 hida@ksyc.jp